

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.85
July 2026

キビタキ(オス) *Ficedula narcissina*

キビタキは、初夏に東南アジアから、繁殖のため日本へはるばる渡ってくる夏鳥です。

オスは鮮やかな黄色い羽とオレンジ色の喉元、黒色の頭でコントラストが美しく、大きさはスズメとほぼ同じくらい。なわばり主張やメスへのアピールのため、「ピッコロ、ピッコロ」とリズムカルな声でさえずります。

秋には東南アジア方面へ海を渡っていきます。

葉が繁ってきたばかりの頃、札幌市西区の森のベンチで休憩していたら、近くの枝に飛んできました。



札幌市博物館活動センター25周年—そのルーツを探る—

文／学芸員 田中 嘉寛

■札幌市博物館活動センターについて

札幌市博物館活動センターは2001年にオープンしてから今年で25周年になりました。そのため「子供のころよくきていた」という声を時々いただきます。札幌市博物館活動センターでは札幌市の博物館計画を検討しつつ、ソフト事業と呼ばれる博物館活動を行ってきました。例えば、資料収集によって収蔵資料はおよそ10万点に成長しました。タンポポや昆虫のような身近な札幌の自然を示してくれる標本や、サップロクジラ(図1)のような新種の根拠となる学術的に貴重なタイプ標本もあり、多彩なコレクションを誇ります。また、年間をとおして無料で常設展、企画展などの「展示」がみられ、自然観察会、ワークショップなどの交流活動を行っています。また、北海道大学総合博物館や水族館施設AOAO SAPPORO、さとらんど、市内の図書館などとも連携して交流活動(展示や講演会)、そして研究を行っています。今回は25周年に合わせて札幌市の博物館計画と札幌市博物館活動センターの歴史を振り返ってみます。

■札幌市の博物館計画の歴史

札幌市の博物館計画は、1986年に札幌市教育委員会で検討が始まりました(表1)。ただし、計画は突如として生まれるものではありません。人がいて、文化があって、初めて博物館計画は胎動するものです。計画以前に、小さな、しかしいくつものルーツがあるはずで、北海道のミュージアムについての情報を歴史の視点から集めた『北海道博物館史料』という書籍で「札幌市に市立の博物館を建設すべきとの声は、昭和40年代頃からあり」という記述を見つけました[1]。昭和40年代は1965年から1975年にかけてのことですので、いまから半世紀近く昔のこと、私も当時を見た訳ではありませんが、その頃の出来事を中心に文献調査を行い、札幌市における博物館



図1：サップロクジラの生体復元図(生きていた時の様子の推定図)
新村龍也学芸員(足寄動物化石博物館)作。[9]

計画の始まりのさらに前史と思える2つの事柄を見つけましたので、簡潔にご紹介します。

まず、板垣武四氏(1916-1993)は北海道和寒村(当時)に生まれ、東京に進学、戦中は神戸市で働き、1946年から札幌市に入職、1971年から20年間市長を務めました。1971年に示された市政方針には「香り高い市民文化」が含まれ「市民のソフトなニーズ」に応えるとなりました(新札幌市史5巻通史5下)。札幌についての様々な事柄をまとめた書籍シリーズ「札幌文庫」もこのころ始まった文化事業です。

次に、1979年に刊行された「札幌文庫」には、北海道立近代美術館の倉田公裕館長(執筆当時)による「札幌学事始」と題するエッセイが掲載されました[2]。倉田氏は博物館学の専門家です[3,4]。倉田氏はこのエッセイのなかで、札幌には「博物館とか美術館の数は少ない」と課題を示し「知識生産力、つまり、ソフトは弱い」と分析しました。

上記のように、1970年代に課題を受け止め、博物館の設立について検討が進み、1986年に博物館計画へとつながったと考えられます。特に上記で共に用いられた「ソフト」という言葉は、2001年にスタートした札幌市博物館活動センターの活動方

針が「ソフト」事業であるということと無関係ではないように思えます。施設というよりも知識生産力を持つ機構を目指し、札幌市博物館活動センターが作られ、本当に大勢の人々の想いが混じり合わさって、動きが生まれ、現在につながっているのです。

■追記

最後にもっと昔の動きの一つをご紹介します。それは1958年の北海道大博覧会で、化石や恐竜の展示が博覧会場(中島公園)に作られました[5]。板垣氏は博覧会事務局長として関わりました[6]。博覧会には多くの北海道民が来場し「初めて古生物の展示を見た」という方も多かったことでしょう。その後、1970年代から1980年代にかけて、北海道内(たとえば沼田町、足寄町、むかわ町、幕別町、滝川市、三笠市)では古生物系ミュージアムが計画、建設されました[7]。来た、見た、こうしたいと思った。北海道大博覧会は、人々に、そしていくつものミュージアムのあり方に影響を与えたのではないかと思います。

より詳しく知りたい方は文末の文献をご覧ください。

参考文献

1. 亀谷隆. 北海道博物館史料. 北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会; 2006.
2. 倉田公裕. 札幌学事始. 札幌風土記. 札幌: 札幌市; 1979. p26-43.
3. 倉田公裕. 博物館学. 東京堂出版; 1979.
4. 田中嘉寛. 日本における博物館主要機能の関係性についての理論史:「流れ」と「相互作用」に注目して. JMMA; 2026.
5. 田中嘉寛. 1958年の北海道大博覧会(中島公園)にあった古生物展示について. 北海道の文化; 2025.p26-35.
6. 板垣武四. 思い出すま. 北海道新聞社出版局; 1992.
7. 田中嘉寛. ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたか -北海道の古生物系ミュージアムにおける脊椎動物化石発見と研究に注目して-. 今金地域研究; 2026.7. p1-14.
8. 田中嘉寛. 札幌市の博物館計画のこれまでとこれから 札幌市産セミクジラ化石にける期待. 博物館研究; 2024.59.p32-35.
9. Yoshihiro Tanaka, Toshiyuki Kimura, Tatsuya Shinmura, Hiroto Ohira, and Hitoshi Furusawa.(2025). A new member of a large and archaic balaenid from the Late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly fills a gap of right whale evolution. Palaeontologia Electronica, 28.2.a37

期	年度	おもなできごと
建設計画期	1986 昭和61	教育委員会で自然史系博物館の検討を開始
	1989 平成元	博物館計画が教育委員会から市民局へ移管
	1993 平成5	市民から新しい博物館を作る提言
	1994 平成6	札幌市博物館基本構想委員会を委嘱
	1996 平成8	札幌市博物館基本構想委員会から自然系総合博物館を目指す提言『札幌市博物館基本構想』提出 博物館準備委員会設置
	1997 平成9	『博物館基本計画の検討に係る中間まとめ』提出
	1998 平成10	行財政改革推進計画に伴い、施設の建設は凍結
ソフト活動期	1998 平成10	開館準備、活動計画に関する提言 学芸員(1人目:古生物学)着任
	2000 平成12	札幌市第4次長期総合計画と第1次5年計画スタート
	2001 平成13	『札幌市博物館計画推進方針』を策定 学芸員(2人目:植物学)着任 サッポロカイギュウ化石発見 札幌市博物館活動センターを開設し博物館活動を展開
	2007 平成19	サッポロカイギュウの報告書出版
	2008 平成20	サッポロクジラ化石発見
	2011 平成23	第3次札幌新まちづくり計画
新計画期	2012 平成24	市民と有識者によって成る次世代型博物館計画検討委員会を発足
	2014 平成26	『(仮称)札幌博物館基本計画』を策定
	2016 平成28	札幌市博物館活動センターが中央区から豊平区に移転 『(仮称)札幌博物館展示・事業基本スキーム』を策定
	2018 平成30	『(仮称)札幌博物館展示・事業基本計画』を策定
	2025 令和7	サッポロクジラを新属新種とする論文出版
	2026 令和8	センターにて「サッポロクジラホール」(常設展)オープン

表1：札幌市の博物館計画と札幌市博物館活動センターの歴史

田中[8]の表に、2024年以降の動きを追加。サッポロカイギュウの発見年については諸説ありましたが、発見者への聞き取りを行って修正しました。



札幌市博物館活動センター
Youtube動画リストができました!
ぜひご覧ください!

「標本」と聞くと、どのよう
なイメージが頭に浮か
びますか?今回は、ク
ロテンやエゾリスなど動物
の標本ではなく、「植物標
本」のお話をします。
植物を乾燥押し葉標本
にするにはまず、紙に挟
み、重しをかけ水分を抜
き、乾燥させます。また、
温風で乾燥させたり、マ
イナス20度を下回る冷凍
庫で冷やしたりし、菌や
昆虫によって標本が
食べられたり、カビが
生えたりして傷むの
を防ぎます。それから
時間をおき、台紙に貼
り(マウントという作
業)、植物名や採集場
所についてのデータ
が書かれたラベルを



マイナス20度以下にも冷えるディープフリー
ザーから取り出された標本は、結露などを落
ち着かせるため、さらに一定時間おいてから
マウント作業に取りかかります

この行程を実際に見て
知った上で、あらためて
植物標本を目にすると、
実際にそこに咲いている
かのようないきいきとし
た姿に感動をおぼえまし
た。標本になるというこ
とは、長く生命を輝かせ
ることなのではないかとい
う感想を個人的に抱いたの
でした。

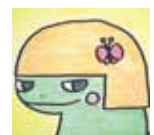
ホット
コラム

展示室につき
標本、かがやきつづける
いのち

○月×日

展示解説員

家守(やもり)



コレクション クエスト

ふだん公開していない
収蔵物を紹介します。
さあ、標本の世界を冒険だ！

当センター収蔵庫には鳥の剥製(はくせい)もあります。引継ぎで聞いた話では、当センターが開設される前の1998年ごろに藻岩山の山頂にあった展示施設から移管されたものも多いそうです。受け入れの際、長年の展示のゆがみを整え、脚には太い針金を取り付けて、いつでも展示に使えるようにしました。



標本No.SMAC333 アカゲラ(展示用剥製)

※動物の剥製には本剥製(展示用)、仮剥製(基本的には学術研究用)の2タイプがあります。

25年間スタンバイしていた鳥たちが、2026年冬の企画展「コレクション・クエスト～バックヤードのちから～」展で収蔵庫から飛び出す予定です！
文・写真/学芸員 山崎 真実

File No.21 地形が生んだビールの街 ～月寒台地とホップのつながり～

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、さまざまな活動を紹介します。

ビールのおいしい季節。実はセンターの平岸高台小学校側の敷地には、ビールの原材料であるホップが植えられています。夏に松ぼっくりに似た可愛い「毬花^{きゅうか}」をつけるこの植物は、当センターが建つ「月寒台地」と深いつながりがあります。

約4万年前の支笏火山の噴火でできた月寒台地は水はけが良く、稲作には不向きでしたがホップ栽培には最適でした。かつて周辺には広大なホップ園が広がり、地域の産業を支えました。今は宅地化されましたが、札幌のビール文化はこの地形から生まれたのです。地球の成り立ちと暮らしのつながりを感じますね。

香りに魅了され私も自宅で栽培中です。ご来館の際は大地の歴史に思いをはせ、外で育つホップを探してみてください。



※写真はイメージです



交通アクセス

- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
- 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター information

入館料:無料
開館日:火曜～土曜 開館時間:10時～17時
休館日:日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス
二次元コード



さっぽろ市
02-D05-26-1337
R8-2-940

発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <https://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュージス・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。